



# 尾久西だより

荒川区立尾久西小学校  
発行日 令和2年5月11日  
発行者 校長 芝田智昭

No. 348 5月号

## 尾久西の歴史に力をもらう

「今度は下の子がお世話になります。」「4月に孫が入学します。」こうした声をいただくとは本当にうれしく、そして尾久西小がこれまで築いてきた伝統を実感します。親子三代卒業生というご家庭も少なくありません。この時期、気持ちが沈みがちで先の見通しをもちづらいですが、尾久西の歴史を改めて振り返ると、今の私たちは力をもらうことができます。

本校は、1923（大正12）年に北豊島郡尾久西尋常小学校として開校しました。子どもの数769人、職員10人、教室が足りないため一つの教室を早く来る組と遅く来る組で交代で使う授業も行っていました。この年の9月に発生した関東大震災によりこのあたりの人口が急に増え、翌年（大正13）年4月には児童数が1306人になりました。学習の場を整備するために増築を続けていきますが、2回の火事により校舎などが焼失し、その度に子どもたちは不自由な思いをしました。

1941（昭和16）年に太平洋戦争が始まると、戦禍を逃れるため3年生以上の子ども650人が福島県に集団疎開しました。実際に疎開した「あぶくま会」の方々が毎年6年生に当時のことを話してくれます。私も昨年話を伺いましたが、親元を離れた現地での生活は辛く厳しいものでした。そして1945（昭和20）年4月3日の夜、空襲による火事に見舞われ、尾久西小は全焼しました。火の粉は吹雪のように街に流れ、都電通りはまるで火の川のようにだったと記録にあります。

校舎はなくなりましたが、その年の10月に疎開先から帰ってきた子どもたちは、大門小学校の教室を借りて授業を始めました。その後校舎を再建し、1948（昭和23）年に新しい校章を決め、1949（昭和24）年には尾久西小学校父母と先生の会〈現在のPTA〉ができました。1958（昭和33）年には校歌が決まり、1968（昭和43）年から、現在も使っている校舎の建設が始まりました。

このように、尾久西小の子どもたちと保護者、地域の方々、そして教職員は、その時々  
の困難に直面し、ある時は我慢を重ね、ある時は知恵を絞り、常に希望を失わず先の明か  
りを信じて歴史と伝統を紡いできました。だから、現在の我々も、尾久西の先輩たちに習  
い、今できることに全力を尽くし、未来をつくっていかねばなりません。本校の校章  
は雪の結晶をモチーフにしており、六角形の辺は六つの学年の子が健やかに育つよ  
うにとの願いが込められています。今を乗り越え、子どもたちの成長を後押しでき  
るよう、教職員一同、引き続き力を尽くしてまいります。